

## 第140回 岡山外科会

日 時：平成11年10月17日(日) 10時00分より

場 所：総社国際ホテル4階 吉備の間

会 長：杉 生 了 亮

(平成11年11月18日受稿)

### 1. 頸椎に生じた Osteoid osteoma の1例

岡山大学整形外科 平松久和 川井 章 原田良昭  
井上一

24歳、女性の第3頸椎横突起に生じた類骨骨腫の1例を報告する。

頸椎に発生する類骨骨腫は非常に希で、3%以下である。

3年前より持続する夜間痛は消炎鎮痛剤で消退した。

手術は、後方より進入し、腫瘍全摘術を行い、椎弓根スクリューにて内固定を行った。

脊椎横突起後方に椎骨動脈が存在するため、動脈に接する腫瘍を摘出することとなり、大出血に対する準備が必要である。

### 2. 高齢者に発症した大腿骨骨頭骨折の1例

国立岡山病院整形外科 田中俊輔 小浦 宏 弓手康正  
甲斐信生 田中雅人 中原進之介  
国立岡山病院臨床検査科 山鳥一郎

高齢者に発症した大腿骨骨頭骨折の1例を経験した。症例は87歳女性で、転倒などの外傷の既往はなく、左股関節痛が徐々に出現し歩行不能となった。MRIで左大腿骨骨頭にT1で低吸収域、T2で高吸収域を認め bone marrow

edemaの状態を示していた。その後入院7週目、大腿骨骨頭骨折を生じていた。骨粗鬆の強い高齢者では一過性と考えられる bone marrow edemaでも骨頭骨折をおこす可能性がある。

### 3. Cannulated screw にて固定した大腿骨頸部骨折術後の転子下骨折の2例

岡山赤十字病院整形外科 寺田忠司 小西池泰三 東原信七郎  
中西一夫 小野勝之

比較的稀な大腿骨頸部骨折骨接合術後に転子下骨折を生じた2例を経験したので報告する。共に高齢女性で、転倒により受傷(Garden III, II)。Cannulated screw 3本にて骨接合。術後再び転倒、遠位screw孔を通る転子下骨折を認

めた。再固定には骨頭への血流を考慮し、Huck-step 骨内釘を用いた。骨粗鬆症・screw孔作製による骨皮質構造の脆弱化、及び強斜位でのscrew刺入が原因と考えられた。

#### 4. 大腿骨転子部不安定型骨折に対する trochanter plate 付 D.H.S. の使用経験

岡山大学整形外科 佐野 敬介 佐藤 徹 三谷 茂  
土井 武 井上 一

大腿骨転子部不安定型骨折に対して trochanter plate 付 AO.D.H.S. を用いた 8 例に関して、内側皮質骨の再建の有無、頸体角の推移、telescopin について検討を行った。

術後の頸体角の推移、telescopin は軽度であり、本術式は外側的支持性を失った Jensen の type 3 及び type 5 の症例において有用な再建法であると言える。

#### 5. 小児化膿性膝関節炎の 1 例

岡山労災病院整形外科 東條 好憲 花川 志郎 梶谷 充  
角谷 隆史  
同 小児科 寺崎 智之

今回我々は比較的稀であるサルモネラ菌による化膿性膝関節炎を経験し、その診断に苦慮した症例を報告する。症例は 4 歳男児。転倒後、右膝痛が出現。次第に疼痛増強し、歩行困難となる。関節液は黄白色、培養にて Salmonella

oranienburg (0-7 群) を検出した。再度問診後、乾燥イカ食品を摂取し、軽度の下痢の発症歴があった。治療は抗生素投与と、関節穿刺、排膿、洗浄を行い良化傾向を示し、臨床症状も改善した。

#### 6. 下肢静脈血栓症の検索

岡山大学整形外科 中田 英二 塩田 直史 佐藤 徹  
松尾 直嗣 井上 一

下肢人工関節置換術後の深部静脈血栓症 (DVT) の発生が欧米では高率にみとめられており、近年我が国でも同様の発生率が報告されている。我々は当科における下肢人工関節置換術後の DVT の発生について術前、術後に下肢

静脈造影を用いて調査した。その結果、術後検査において、全人工股関節置換術では 44.1%、全人工膝関節置換術では 58.8% に DVT をみとめた。また DVT の部位別分類を行い、遠位型、近位型、遠位+近位型の 3 つに分類した。

#### 7. いわゆる炎症性腹部大動脈瘤の 1 例

国立岡山病院心臓血管外科 越智吉樹 木村賢太郎 小山朋之  
藤田邦雄 谷崎眞行

Walker らによって提唱されたいわゆる炎症性腹部大動脈瘤は動脈瘤外膜の著明な肥厚と隣接組織との癒着を特徴とするが、その病因については不明な部分も多くまだ統一された見解はえられていない。今回われわれはいわゆる炎症性腹部大動脈瘤の 1 例を経験したので報告する。

症例は 82 歳の男性で、CT にて Mantle sign 陽性の腹部大動脈瘤を認めたため手術を施行した。瘤壁は白色陶磁器様で著明に肥厚しており、

十二指腸、下大静脈などの周囲組織との強固な癒着を認めた。人工血管置換術を行ったが、剥離操作と止血に難渋し、大量輸血を行わざるを得なかった。病理所見では外膜の高度な線維性肥厚と円形細胞浸潤および内膜の著明な粥状硬化を認めた。

いわゆる炎症性腹部大動脈瘤の手術では合併症を避けるためできるだけ剥離操作を少なくするべきであると考えられた。

## 8. 腹部大動脈瘤手術に伴った腹部同時手術12症例の検討

心臓病センター・榎原病院心臓血管外科 篠浦 先 畑 隆 登 津島 義正  
 松本 三 明 濱中 庄平 吉鷹 秀範  
 毛利 亮 近澤 元太 大谷 哲悟  
 児島 亨 榎原 宣

当院で1988年3月～1999年6月の間に腹部大動脈瘤手術に伴った腹部同時手術症例は12人で、胆嚢摘出術3例、鼠径ヘルニア根治術2例、左卵巣摘出術1例、左腎臓摘出術1例、小腸切除術1例、幽門側胃切除術1例、S状結腸切除術

1例、回盲部切除術1例、横行結腸切除術1例、直腸切除術1例であった。全例術後経過順調で、人工血管感染等の合併症はなかった。人工血管置換術に伴う腹部同時手術は原則的に可能と思われる。

## 9. 後腹膜線維症の1例

川崎医科大学胸部心臓血管外科 山本 裕 稲田 洋 石田 敦久  
 三宅 隆 福広 吉晃 遠藤 浩一  
 武本 麻美 藤原 巍

症例は51歳男性、下腹部痛を主訴に当科紹介入院。炎症反応を認めなかった。CTにて腹部大動脈周囲に不整な腫瘍を認め、MRI上T1強調像、T2強調像で低信号を呈した。開腹生検

後、ステロイド療法を行ったところ、腫瘍の著名な縮小を認めた。炎症の急性期でない本疾患に対しても、ステロイド療法は有効であった。

## 10. 動脈管開存症に対して胸腔鏡下手術を施行した1例

川崎医科大学胸部心臓血管外科 平林 葉子 森田 一郎 稲田 洋  
 正木 久男 村上 泰治 菊川 大樹  
 藤田 康文 藤原 巍

症例は、10歳、女児。今回ASD術後の残存するsmall PDAに対して胸腔鏡下動脈管閉鎖術を施行し良好な結果を得ることができた。動

脈管閉鎖術は、低侵襲で今後大いに期待できる術式と考える。

## 11. 小児Fontan手術における無輸血手術

岡山大学心臓血管外科 伊藤 篤志 佐野 俊二 河田 政明  
 大島 祐 浅井 友浩 紀 幸一  
 石野 幸三 笠原 真悟

先天性複合チアノーゼ性心疾患に対する96年以降のFontan手術35例中16例(46%)が無輸血手術で行い得た。'91年～'95年(17例中1例；6%)に比べ増加を示した。内訳はTA7、DORV5、CAVC2、CCH及びMA各1。年

齢は2～16歳。体重は11～45kg。術前Hct.53±5%。再胸骨切開、房室弁や肺動脈の形成例では輸血を要した例も多かったが、無輸血完遂例では成績に差はなく、意義は大きいと考えられた。

## 12. 肺葉内肺分画症の1例

国立岡山病院呼吸器外科 小谷恭弘 東良平 高畠大典

症例は40歳の男性。胸部異常陰影を指摘され、精査目的で当科を受診した。胸部X線写真にて左肺底区内側に結節影および囊胞陰影が見られた。造影CTでは、胸部下行大動脈から直接分岐する径約8mmの異常動脈を認め、肺葉内肺分

画症と診断した。治療は左肺底区域切除術を施行した。病理組織では粘液を含んだ拡張した細気管支、異常動脈が証明され、間質において軽度の炎症細胞浸潤が認められた。

## 13. 気胸3兄弟の治療経験

岡山済生会総合病院外科	藤原俊哉	岡本康久	大原利憲
	日置勝義	勝野剛太郎	丸山昌伸
	小田和歌子	中城徹	池田雅彦
	仁熊健文	高畠隆臣	赤在義浩
	三村哲重	木村秀幸	筒井信正
	広瀬周平		
さかえ外科内科クリニック	榮康行		

我々は同時期に発症、治療した両側気胸の3兄弟を経験した。共に気胸体型で、両親に気胸の既往なし、3例ともに胸腔鏡下手術を行った。当施設では胸腔鏡下ブラ切除を第一選択としているが、再発があり、再発防止のため、アルゴ

ンビームコアグレーター(ABC)による壁側胸膜焼灼を行っている。観察期間は短いが、ABC胸膜焼灼した場合、未だ再発はない。ABC胸膜焼灼によって、上葉の癒着を図り、再発の防止が期待できる。

## 14. 術前術後の肺管理における吸入療法

——岡大二外関連施設のアンケートより——

国立岡山病院外科	佐々木澄治	佐々木奉子	木村賢太郎
岡山大学第二外科	鈴木栄治		
国立岡山病院呼吸器外科	東良平	高畠大典	

一般に術後合併症は肺に関するものが多い。それに関連して“吸入療法”的実体を多施設を対象に調べてみた。開胸を除く全麻例では施設により差はあるものの、ほとんどの施設で術後の処置として、喀痰喀出困難例に吸入が行われ

ていた。その施行割合は、高年齢、長時間の麻酔例なかでも腹部の手術例で高かった。しかし、腹部例でも鏡視下の手術例では麻酔時間に関係なく低く、手術による腹筋の損傷程度に関係することが推察された。

## 15. 胸腺原発ホジキン病の1例

岡山赤十字病院外科	原文堅	森山重治	大塚康吉
	名和清人	古谷四郎	辻尚志
	内藤稔	池田英二	松本英男
	光永修一		

胸腺原発ホジキン病の稀な1例を報告する。

症例は23歳、男性。検診発見。術前診断では胸

腫瘍との鑑別が困難であった。術後病理でホジキン病（結節硬化型）と診断。術後内科にて化学療法施行。1年1ヶ月再発なし。ホジキン病は化学・放射線療法が一般に有効である。しか

し、確定診断にはホジキン細胞を含む病理組織が絶対条件であり、診断的、治療的にも腫瘍摘出をする外科的療法が有用であったと考えられた。

## 16. 胸壁原発軟部悪性腫瘍の1例

岡山大学第二外科 重松久之 市場晋吾 永広格  
青江基 伊達洋至 安藤陽夫  
清水信義

症例は24歳、女性。胸部X-Pで異常陰影を指摘され、右肩甲部腫瘍の生検で、非上皮性悪性腫瘍と診断された。右肺全摘および第5-8肋骨を含めた胸壁合併切除を施行した。病理組織では、紡錘型の細胞が束状に配列しており、核

分裂像や壊死を伴っていた。 $\alpha$ -SMA染色で陽性となり、胸壁原発の平滑筋肉腫と診断された。充分な切除をおこなったが、局所再発や遠隔転移の可能性もあり、厳重な経過観察が必要である。

## 17. 多汗症に対する胸腔鏡下胸部交感神経節遮断術の経験

岡山労災病院外科 間野正之 脇直久 次田靖功  
平成人 高嶋成輝 西英行  
福田和馬 小松原正吉

当院の胸部交感神経遮断術は両側同時施行のため、半挫位の仰臥位とした。麻酔は気管内挿管分離換気下とした。手術創は2ヶ所で3mmのスコープと凝固端子をもちいた。交感神経は第2-4肋骨までを焼灼した。7例に施行して1

例に軽いホルネル微候を認め、2例に上腕の軽いしひれ感を認めた。多汗に対しては全員満足している。術後の代償性発汗は高頻度で発症するため、十分なインフォームドコンセントが必要である。

## 18. 陰嚢内進展の見られた後腹膜脂肪肉腫の1例

岡山赤十字病院外科 光永修一 大塚康吉 名和清人  
古谷四郎 辻尚志 森山重治  
内藤稔 池田英二 松本英男  
原文堅  
同 病理 國友忠義

症例は45歳、男性。平成11年4月初旬に左陰嚢内腫瘍を自覚した。腫瘍は高エコーであり、CTにて後腹膜より脂肪様組織が陰嚢内に連続して進展していたため、5月19日腹膜外経路にて児頭大の腫瘍を摘出した。分化型脂肪肉腫で

あった。脂肪肉腫は被膜形成を有し容易に摘出できるが、再発は高頻度に認められるため、広範囲な切除が必要であると思われた。また高エコーな陰嚢内腫瘍は脂肪肉腫の可能性も考慮すべきであると思われた。

## 19. 骨盤腔内を占拠した血管外皮細胞腫の1例

倉敷中央病院外科 池田博齊 小笠原敬三

症例は84歳男性。便秘を主訴として近医受診し下腹部に腫瘍を指摘された。腹部CTで骨盤腔内を占拠した巨大な後腹膜腫瘍が直腸や膀胱を圧排するのを認め、血管造影で上直腸動脈から血流を受けた腫瘍濃染を認めた。直腸への直

接浸潤は認めず、直腸を温存し腫瘍を摘出し得た。病理組織学的には毛細血管基底膜外周に腫瘍細胞の増殖を認めたため、比較的稀とされる後腹膜原発の血管外皮細胞腫と診断された。

## 20. 腸間膜脂肪織炎の1例

岡山労災病院外科	脇 久 平 成 人 福 田 和 馬	間 野 正 之 高 嶋 成 輝 小 松 原 正 吉	次 田 靖 功 西 英 行
同 放射線科	山 本 博 道		
高取病院	高 取 悅 子		

今回我々は腸間膜脂肪織炎という比較的稀な疾患を経験したので報告する。

症例は58歳の男性で主訴は腹部重圧感である。上腹部の腫瘍を指摘されたが特徴的な画像に

よって非観血的に腸間膜脂肪織炎と診断し得たため、保存的に治療することができた。

文献をもとに、主にこの症例の画像診断について述べる。

## 21. イレウス管による腸重積の1例

川崎医科大学消化器外科	野 村 長 久 岡 保 夫 吉 田 和 弘 岩 本 末 治	山 村 真 弘 林 次 郎 山 下 和 城 山 本 康 久	木 元 正 利 浦 上 淳 真 嶋 敏 光 角 田 司
-------------	-------------------------------	-------------------------------	-----------------------------

イレウス管挿入による腸重積は稀に報告がある。イレウス管挿入後は腸重積の可能性もあるので臨床経過に十分注意すべきである。診断に

は腹部超音波が有用で、診断後速やかに開腹術を行う必要がある。

## 22. 下行結腸癌術後、会陰部皮下組織に転移をきたした1例

岡山大学第二外科	鈴 木 栄 治 土 井 原 博 義 佐 藤 病 院 外 科	太 田 徹 哉 平 井 隆 二 林 逸 平	村 上 正 和 清 水 信 義
	藤 原 弘 道		

患者は77歳、女性。下行結腸癌(低分化腺癌)にて左結腸切除術、D2を施行。術後11ヶ月目に会陰部に腫瘍を認め下行結腸癌の転移と診断した。頭部CTにて脳転移を認めたためγナノイフにて加療した後、会陰部皮下腫瘍を含む腹

会陰式直腸切斷術、右鼠径部リンパ節および直腸周囲の局所リンパ節郭清を施行。病理診断は低分化腺癌で下行結腸癌会陰部皮下組織転移、右鼠径部リンパ節転移だった。下行結腸癌の稀な転移症例を経験した。

### 23. 腹腔鏡補助下・経肛門的根治術を施行したヒルシュスプルング病の4例

岡山大学第一外科 漆原直人 尾山貴徳 金川泰一朗  
田中紀章

これまでヒルシュスプルング病の根治術として Duhamel 変法を行ってきたが、最近では腹腔鏡補助下プルスルー法を行っており、またこの経験をいかし1例では経肛門的アプローチのみで根治術を施行し良好な結果を得たので報告する。最近経験したヒルシュスプルング病は4例で手術時年齢は1ヶ月～22ヶ月。aganglionic

segment は2例が直腸までの short segment、残りの2例がS状結腸までの rectosigmoid type であった。手術は最初の3例が腹腔鏡補助下に、1例は非開腹経肛門的アプローチのみで根治術を施行した。術後いずれの症例も良好な排便がみられている。

### 24. バルーン拡張術が著効した食道 web の1例

岡山市立市民病院外科 浅野博昭  
岡山労災病院外科 平成人 次田靖功 高嶋成輝  
西英行 福田和馬 間野正之  
小松原正吉

患者は78歳、男性。約9年前より嚥下障害が出現。約半年前より、固体物が摂取不能となった。食道透視で第6頸椎のレベルの頸部食道後壁に造影剤の jet phenomenon を伴う高度の膜状の狭窄を認めた。10mm, 15mmバルーンにて拡

張術を行い、嚥下障害が完全に消失し、1ヶ月半後の透視では、狭窄は全く認めなかった。本例は、Hgb 12.8と軽度の貧血は認めたが血清鉄は正常。舌に異常は認めず Plummer-Vinson 症候群ではなかった。

### 25. 胸部食道癌術後頸部食道に発生した二次癌症例に対する喉頭温存遊離空腸移植術の検討

岡山大学第一外科 繁光 薫 猶本良夫 羽井佐実  
山辺知樹 高岡宗徳 光岡直志  
磯崎博司 田中紀章

胸部食道癌術後に発生した頸部食道癌に対し、頸部食道切除・遊離空腸移植による再建を行った4例を経験したので報告した。胸部食道癌術後の経過観察において、残存頸部食道は、他の頭頸部領域とともに二次癌の発生部位として重

要である。本術式において、良好な QOL を得るという観点から喉頭温存を考慮すべきであり、反回神経損傷の回避には喉頭後面に小柄付きガーゼを通してオクトパス鉤による牽引・視野の展開が有用である。

### 26. 高齢者食道癌症例の検討

岡山大学第一外科 光岡直志 猶本良夫 山辺知樹  
繁光 薫 高岡宗徳 羽井佐実  
田中紀章

教室において、1984年1月から、1998年12月までの15年間に経験した食道癌381症例を対象

に、75歳以上の高齢者症例の治療および予後について検討した。75歳～79歳の切除症例と、80

歳以上の切除症例の生存率を比較すると、80歳以上の成績は、圧倒的に悪かったが、切除と再建をわける二期分割手術によって、侵襲軽減、

術後早期死亡の減少という目的は、達せられていると考えられた。

## 27. 当科における sm 癌予後不良症例の検討

岡山大学第二外科	葉山 牧夫	村上 正和	太田 徹哉
	中野 知治	土井原 博義	平井 隆二
	清水 信義		

1979年から1997年の初発 sm 癌切除症例、62例について検討した。予後調査の観察期間の中央値は4年3ヶ月で、死亡症例は14例。死因は、原癌死7例、他癌死2例、他病死5例であった。原癌死では5年以内の死亡が88%あり、残胃再

発以外の症例であった。病理学的再発予後不良因子としてはN(+), ly(+), v(+)、低分化型などが考えられた。残胃癌を含めた総合的な経過観察が必要と考えられた。

## 28. 血液透析患者における胃癌手術症例の臨床病理的検討

岡山大学第一外科	小坂 芳和	松野 剛	五味 慎也
	合地 明	笹本 博美	渡辺 剛正
	磯崎 博司	田中 紀章	

当科で手術した透析患者の胃癌合併10症例11病巣について報告した。早期癌は6例、進行癌4例であった。前者においては肉眼型は隆起型、組織型は分化型が多かった。術死はなく、1例に腹腔内膿瘍が見られるのみで手術は安全に行

えた。予後は、進行癌は全例癌死し、早期癌は8年長期生存中である1例を除き、他の5例は透析合併症にて死亡した。よって透析管理の改善と胃癌の早期発見が重要である。

## 29. 当科における残胃癌の検討

岡山大学第一外科	笹本 博美	松野 剛	五味 慎也
	合地 明	小坂 芳和	渡辺 剛正
	磯崎 博司	田中 紀章	

1989年から1999年までに、岡山大学第一外科で手術を行った残胃癌19例を対象として、臨床病理学的に検討した。残胃癌発症までの期間はBillroth II法がI法より有意に長く、I法では組織型は分化型、占居部位は非断端部に多い傾

向が見られた。術後生存率は、I法とII法を比較すると同等であったが、初回悪性例の方が良性例よりも有意に高かった。残胃癌全体の5年生存率は60.8%であった。

## 30. 当院における乳癌術後局所再発症例の検討

おおもと病院外科	高間 雄大	梅岡 達生	村上 茂樹
	石賀 信史	庄 達夫	石原 清宏
	酒井 邦彦	山本 泰久	

乳癌局所再発117例を対象に部位形態別に検

討を行った。

結節型皮膚再発、筋間リンパ節再発では原発巣の陽性数が少なく、無病期間も長く予後良好で、限局傾向が強いといえる。逆に散布型・

浸潤型皮膚再発では全身疾患としての性格が強く予後不良であった。他のリンパ節再発では、両タイプの症例が見られた。

### 31. 肝細胞癌単発性副腎転移の1切除例

国立岡山病院外科 高畠大典 小橋雄一 佐々木奉子  
田中信一郎 河合俊典 藤岡正浩  
臼井由行 野村修一 佐々木澄治

今回我々は単発性の副腎転移を来たした肝細胞癌の症例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。症例は66歳男性、H 6年から HCC の既往があり TAE を数回、肝部分切除を1回施行された。H 8年6月の腹部CTで右副腎腫

瘍を指摘され精査の結果、副腎転移を疑い摘出術を施行した。肝細胞癌の副腎転移は剖検例では比較的多くみられるが、外科的切除の対象になることは少ない。その適応には十分な検討が必要である。

### 32. 肝癌における開胸下マイクロ波凝固療法による治療経験

川崎医科大学付属川崎病院外科 溝上宏明 谷口博理 吉田真由子  
吉田一典 土持茂之 木曾光則  
光野正人 川崎祐徳 佐野開三

1998年2月から1999年2月までの期間で、6例の開胸下マイクロ波凝固治療を行ったので報告した。腫瘍の平均サイズは15.3mmであった。平均凝固時間は75Wで13.7分であった。

術中超音波検査にて描出できなかった1例の

み不完全凝固であったが、他5例については充分に凝固できた。開胸下マイクロ波凝固治療は低侵襲であり、肝癌の治療戦略の1つとして選択される。

### 33. 高度肝硬変合併肝癌に対する鏡視下肝切除術および肝マイクロターゼ凝固療法

岡山大学第一外科 貞森裕 八木孝仁 稲垣優  
志摩泰生 木村臣一 浜崎啓介  
田中紀章

肝予備能低下のため治療選択が限られていた高度肝硬変合併肝癌14症例に対して、鏡視下肝マイクロターゼ凝固療法(MCT)を11例に、腹腔鏡下肝部分切除を3例に施行した。術後経過は概ね良好であり、早期退院が可能であったが、

術後の血小板減少が今後の問題点と思われた。高度肝硬変合併肝癌に対して、鏡視下MCT、腹腔鏡下肝切除術は、有効なTreatment Optionとなり得ると思われる。

### 34. 黄色肉芽腫性胆囊炎の1例

国立岡山病院外科 佐々木奉子 小橋雄一 木村賢太郎  
 高畠大典 河合俊典 藤岡正浩  
 田中信一郎 野村修一 佐々木澄治  
 同 病理 山鳥一郎

症例は66歳、男性。H11年3月より右季肋部痛があり、近医にて、胆石、胆囊炎の加療を受けていたが胆囊腫瘍を指摘されたため精査加療目的にH11年6月に入院となった。術前造影CTにて、胆囊炎と膿瘍を疑ったが、癌を否定する

ことができず、術中迅速病理を行った。結果、悪性像なく胆摘と肝S5部分切除を行った。病理診断は黄色肉芽腫性胆囊炎であった。適切な術式決定のため術中迅速病理は不可欠なものであろうと思われる。

### 35. 十二指腸温存脾頭切除術を施行した脾囊胞性疾患の1例

岡山大学第一外科 小野亮子 志摩泰生 木村臣一  
 八木孝仁 稲垣優 貞森裕  
 松野剛 浜崎啓介 高倉範尚  
 田中紀章

症例は60歳、女性。以前より食欲不振があり画像にて脾頭部に径2cmの嚢胞性病変を指摘されていたが本年6月のMRIで径3cmと増大を認めたため当科入院。画像所見よりSerous cystadenomaが疑われ、8月、十二指腸温存脾

頭切除術を施行した。病理診断はSimple cystであった。

当科で経験した十二指腸温存脾頭切除術を施行した3例について検討報告した。

### 36. 一般病院での3D-CTの役割

薬師寺慈恵病院 武家尾拓司 青山雅 薬師寺公一

最近の画像診断の進歩の速さには目を見張るものがあります。従来は血管病変の診断には血管造影が必要でしたが、コストの点からX線連続撮影装置を持てない、すなわち血管造影が出来ない一般病院にとって3D-CTは①脳動脈瘤、

閉塞性動脈硬化症の診断が可能である、②静脈注入で動脈相が撮れるのでアングリオCTが可能である、③胆管、尿管のより鮮明な立体画像が得られることより、きわめて有用な診断機器と思われます。

### 37. 内頸動脈閉塞症の外科的治療——脳血流動態評価を用いて——

岡山大学脳神経外科 松井利浩 徳永浩司 中嶋裕之  
 田宮 隆 松本健五 大本堯史

片側の内頸動脈系の閉塞性病変を有する症例に脳血流動態評価を行い、手術適応症例を選択した。脳循環動態評価には脳血流量を定量化できるSPECT(<sup>123</sup>I-IMP, <sup>133</sup>Xe), Xe-CTを用い、安静時脳血流量と脳循環予備能を測定算出

し、これらが低下した症例を手術適応症例とした。3年間に6例の浅側頭動脈—中大脳動脈吻合術を施行し、全例において脳血流動態が改善し再発作が予防できた。

### 38. 軽微な顔面打撲を契機に発見された第4脳室腫瘍の1例

岡山労災病院脳神経外科 竹内亮 片山伸二 久山秀幸  
同 小児科 難波真平  
同 放射線科 寺崎智行  
同 放射線科 山本博道

髓芽腫は小児の脳腫瘍であり全国集計による  
と原発性脳腫瘍の2.3%にすぎずきわめて悪性の  
脳腫瘍である。症例は5歳女児。主訴は頭痛と  
歩行障害。眼振、複視、軀幹失調を認め、CT、

MRIでは第4脳室から小脳虫部にかけての腫瘍  
性病変が確認された。腫瘍摘出術後、放射線及  
び化学療法を追加し、現在経過良好である。